



福ねこの絵付けを楽しむ愛育寮の利用者ら(2面に関連記事)



CONTENTS

- P3** 障害者向け「人間ドック」 開始から1年
- P4-5** 新型コロナの影響 ギおんの社会議
- P6** 各施設で夏イベント開催
- P7** 旭川荘をちょっと元気に 昼の市開催
- P8** Zoom活用しオンライン授業

旭川荘 だより

vol.

257

2020.09.01 発行

発行/社会福祉法人 旭川荘
〒703-8555 岡山市北区祇園866
TEL 086-275-0131 FAX 086-275-5640
<http://www.asahigawasou.or.jp>



昼休みを利用して来場した職員たちで賑わう昼の市会場(7面に関連記事)



ウィズコロナとICTへの挑戦を

理事長 末光 茂

新型コロナウイルスの蔓延は、留まるどころを知らません。世界規模での蔓延は、地球の隅々にまで、そして全世代に及びつつあります。日本でも一時期減少していた感染者が、大都会だけでなく、地方でも急増しています。岡山県、愛媛県も例外ではありません。

引き続き利用者の命第一に、緊張感を緩めず、「ウィズコロナ」を基本に頑張り抜かねばなりません。何よりも「3密」の回避を忘れてはなりません。その為にも、勤務や日課、諸行事の見直しとともに、情報通信機器を活用した取り組みへのチャレンジが合わせて求められます。

旭川荘では、施設長会議をオンラインで何回か実施しました。12月の「第38回旭川荘医療福祉学会」も、オンラインでの開催に向け、準備を進めています。

診療面でも、電話・オンラインによる診療が特例的に認められ、拡大しつつあります。2018年、オンライン診療料や遠隔モニタリング加算が診療報酬に新設され、テレナーシング(電話での看護)も注目されつつありますが、コロ

ナを機に一步進んだ感があります。

その背景には、情報通信機器の普及があればこそです。2019年、総務省の「令和元年度版情報通信白書」によると、世帯でのスマートフォンの保有割合は79.2%、個人のインターネット利用率は79.8%にも上り、通信環境の充実ぶりが示されています。

支援や介護に手厚い人手が必要な対象者に日々接する我々は、ややもするとこの方面での取り組みに慎重で、結果として後手になりかねません。時代遅れと言われないように心掛けたいものです。

直接手の温もりを持ったコミュニケーション支援でなければならないものをしっかり守りつつ、あわせて機器に頼れる部分は最大限そちらに移行するチャレンジを、今回の新型コロナウイルスを契機に大きく前進させるよう願います。

福ねこ絵付けプロジェクト 20施設359人が参加 10月には作品コンテストも

新型コロナウイルスの早期終息への願いを込めて、旭川荘の職員や利用者が素焼きの招き猫の土台に絵付けをして楽しむ「コロナに負けない! 福ねこ絵付けプロジェクト」が、8月から荘内20施設で始まりました。

同プロジェクトは、新型コロナの影響で自粛生活が長引く中、職員と利用者が同じテーマで活動し楽しみを共有しようと、旭川荘新型コロナウイルス肺炎対策本部などが主催。7月に絵付けの参加者を募ったところ、旭川荘療育・医療センターや旭川敬老園、竜ノ口寮など20施設から、

計359人の申し込みがありました。

利用者20人、職員10人が参加する愛育寮では、8月21日に一部の利用者が絵付けの活動を行いました。職員にサポートしてもらいながら好きな色のアクリル絵の具を土台に塗り重ねる人、線やドットを丁寧に描く人、



招き猫は福を呼ぶ縁起物として知られる。絵付けに使う素焼きの猫は、招き猫美術館のオリジナル

彩色した後にスパンコールを貼っていく人…など、各自それぞれのやり方で絵付けを楽しみ、1時間足らずの間に個性豊かな作品が完成しました。

各施設で絵付けした作品は9月中に一次審査を行い、厳選した約100点を製品サイト「ぎおんの杜から」(<http://asahigawasou.com/>)に掲載。10月には優秀作を投票で選ぶ「福ねこコンテスト」を行います。コンテストの詳細は後日、同サイトとイントラにてお知らせします。

同プロジェクトの問い合わせは企画広報室まで。



各施設から企画広報室に寄せられた絵付け作品の一部

障害者向け「人間ドック」1年の実績を振り返る

旭川荘療育・医療センターでは昨年4月、重度障害者向けの簡易人間ドックを開始しました。昨年は8人の障害者が受診し、専門医療機関での精密検査や治療につながった方もいるなど、一定の成果を上げています。また、実施しながら様々な課題も見つかり、改善を図ってきました。その内容を報告します。(なお8月現在、新型コロナウイルス感染症対策のためドックの受付は休止しています)

受診した8人は、岡山市在住の方が4人、赤磐市が2人、倉敷市と総社市が1人ずつと広域にわたっており、これまでに旭川荘を利用したことがない方も含まれています。また、受診者はいずれも知的障害または重症心身障害のある人で、年齢は20代から60代と幅広くなっています。

受診に当たっては、障害者の特性を踏まえた工夫をしています。初めて訪れる診察室やスタッフに戸惑ってしまう方も多いので、事前に受診者との信頼関係を作ることから始めています。療育・医療センターの保健師が受診日の1か月ほど前に受診者のもとを訪れ、本人や保護者とのやりとりを通じてコミュニケーションを深めます。これによってドック当日の検査をスムーズにスタートすることができています。

それでもレントゲン室に入ることや採血を嫌がる方もいますが、その場合は検査の順番を変更したり、お気に入りの本を見てもらったりするなどの工夫をして進めています。

検査項目には、一般的な項目のほか整形外科や耳鼻科、歯科・摂食嚥下機能など、障害者向けに旭川荘が独自に追加した項目もあり、概ね好評をいただいています。異常が見つかった場合は、これらの診療科で後日治療を受けることもできます。

受診後は、淳風会健康管理センター(岡山市北区大供)の協力のもとに結果票を作成し、1カ月後に医師から保護者にお渡ししています。検査結果の説明のほか、アレルギーや生活習慣などの相談にも応じています。

終了後に保護者を対象に実施したアンケートでは、皆さん一様に「満足した」と回答し、「不安が解消された」「また受けてみたい」などの声も届いています。



専用の用具を使って行われる視力検査

実施しながら明らかになった課題もあります。予想より多くの方が「要精密検査」または「要経過観察」という結果だったことから、精密検査を実施できる専門医療機関を紹介する体制づくりが急務となりました。このため、川崎医科大学総合医療センター(岡山市北区中山下)の協力を得て、内視鏡検査、婦人科検査、乳がん検査を受診できる体制を整えました。実際に同センターでの治療につながった方もいます。

また、費用が全額自己負担(標準項目で2万円)であることが、受診を控える要因になるケースもあるようです。旭川荘は人間ドックの専門医療機関でないこともあって、公的助成を受けることが難しい面もありますが、今後もできるだけ負担を軽減する努力をするとともに、行政との対話も続けたいと考えています。

このようなドックは、全国的にもほとんど例がありません。再開するには新型コロナウイルス感染症の終息を待つ必要がありますが、今後もさらなる改善に努め、より受診しやすく、障害者の健康長寿につながるドックにしていきたいと考えています。

(企画広報室 小幡篤志)



体重測定は車いすのままでも可能



耳の健康チェック

新型コロナの影響 ぎおんの社会議 各施設からの報告

新型コロナウイルスの感染拡大により、障害のある人たちの生産活動の場に大きな影響が及んでいます。モノづくりを行う荘内12施設が参加する「ぎおんの社会議」でも、7月20日にあった会合の中で、「イベント中止が相次ぎ、販売の機会がなくなった」「下請け作業が激減した」…など苦境を訴える声が続きました。一方で、コロナで需要が拡大した布マスクの製作や、チラシによる荘内向けの営業、施設外就労に活路を求める動きも。各施設からの報告を紹介します。



吉備ワークホーム

製品を委託していた岡山駅や岡山空港の土産物店、東京のショップ、イオン岡山のハレマチなどが休業になり、一時発注が滞っていた。最近になって徐々に売り上げ報告が入るようになってきている。

お土産用の「菓子箱」と「わっぱ」の下請け作業は、コロナの影響で全てストップした。少しずつ回復しているが、以前の状況には戻っていない。

コロナで多忙を極めたのは縫製部門。4月に療育・医療センターから布マスク500枚の注文が入った後、総社市のデニムマスクの製作依頼も受けた。布マスクは新聞にも掲載されたので、県内外からたくさんの注文があった。感染予防に欠かせないマスクの製作で社会に貢献することができ、利用者もやりがいを感じている。

屋の市（毎月第4水曜日に資料館南で開催）は自粛をせずに出店していて、「アマビエ」のストラップなども作って販売した。また、簡単なガチャガチャ（カプセルトイ）の機械を買い、日本地図パズルの都道府県ピースにマグネットを付けたものをカプセルに入れて、1回100円で販売してみた。外部のイベントが再開されるようになったら、来場者に合わせてカプセルの中身を変えるなどいろいろ試してみたい。



吉備ワークホームはガチャガチャを使った販売も

あおば

手工芸品などの製作のスピードを落としつつ、一方で新たに荘内の環境整備などの作業を受託しながら、なんとかやりくりしている。

水引製品は岡山市内のホテルに置いてもらい、海外からの観光客にも好評だったが、ホテル業界もコロナ禍のダメージが深刻で、委託している製品について聞くのはばかられる。状況を見ながら、やり取りをしていきたい。

布マスクの製作にも取り組んだ。新聞で紹介されたため県内外からも注文があり、荘内の関係者にもたくさん買ってもらった。

また、商品を知っていただく、あるいは購入していただくことを目標に、あおばのホームページを立ち上げようかと検討しているところだ。

愛育寮

パン工房（カメラアベーカー）は4月24日に休止した。新型コロナウイルス流行以前より検討してきたもので、支援と製造の両立が難しく、継続が困難となったため。長らく皆様にご愛顧いただき、心より感謝申し上げます。

織工場の結び織マット製作は継続しているが、コロナの影響でイベントが中止となり、現在は作りためている状況。イベント再開の折には、たくさんの種類が用意できていると思うので、是非ご覧いただきたい。

松山ワークセンター

菓子類の売り上げはガタ落ち。秋冬のイベントも中止になり、そこでの販売も見込めない。6月には父の日ギフトとして荘内にチラシを配り、いくらか売れたが、本年度の売り上げは前年度の半分以下になると思う。

少しでもプラスになればと、5月から備中県民局高梁地域事務所の協力を得てランチ用にパンの配達を実施。週に1回注文を取り、工房で焼いたパンを職員が届けている。

園芸に関しては、行政や学校関係などの花の需要は以前と変わらず、売り上げへの影響はないだろう。清掃作業も需要が高く依頼が来ているが、利用者の高齢化もあってなかなか外に出て行けないため、何件か保留にしている。



ランチのパンを配達する松山ワークセンターの職員（手前右）

いづみ寮

窯業班と手工芸班がゆっくりとしたペースで製作活動に携わっている。新たに岡山シーガルズのグッズ作りにも取り組んでいて、ロゴやマスコットキャラクターを入れた小皿などを試作する予定。

いんべ通園センター

普段、バンガラ(★注)の製作を中心にやっているが、コロナの影響で母国に帰れなくなった漁業の技能実習生のほうにバンガラの仕事が流れてしまい、以前のように仕事をもらうのが難しくなっている。

ストラップなどの小物を少量作り、バザーなどで販売するのを利用者も楽しみにしていたが、コロナで備前市のバザーも軒並みなくなってしまった。今後どうするか頭を悩ませている。

新製品としては、さおり織のマスクストラップを作り始めている。耳に掛けるマスクのゴムを頭の後ろでストラップのボタンに掛けて

固定できるようにしたもので、長時間マスクをつけていても耳が痛くならない。月に10～15本程度作っていて、価格は1個500円。トモニや資料館に置いて反応を見ようと思う。



新製品マスクストラップ

★注:カキ養殖に使う器材(採苗コレクター)のこと。2メートル程度の針金にホタテの貝殻とビニールパイプを交互に通して、抜け落ちないように留める。

せとうち旭川荘

コロナの影響で菓子箱折りの作業は一時全くなくなりました。その他の請負作業も同様であり、少しずつ回復はしているが、本来のペースに戻るのには困難な状況である。

印刷時にできるかすれ等で商品にできなかった手ぬぐいを再利用して、布マスクも作った。瀬戸内市地域自立支援協議会が市役所などで開いたマスクの直売会に参加し、他の事業所とともに販売した。

近隣の農家から、収穫したそら豆や冬瓜、そうめん南京などをきれいにして箱詰めする仕事をいただき、施設から農家に出向いて作業をしている。天候にも左右されるので毎日ではないが、依頼があれば行っている。

さらに、地元の介護保健施設の清掃作業を請け負っていて、週に3日、利用者2人と職員1人で行っている。仕事が減った分は他の方向にも切り替え、収入確保に努めている。

かえで寮

かえで寮の利用者は平均年齢が49.8歳で、基礎疾患のある人も多いため、感染リスクを考慮し、日中の活動はごく少人数グループでの実施としている。そのため、今期は竹炭の生産活動を実施できていない状況である。

芸術活動は6月より外部講師による指導を再開し、少しずつ作品づくりに取り組んでいる。

わかば寮

荘内の行事や地域の行事が中止になるなど、販売機会の減少により、菓子工房の売り上げは前年度に比べ減少している。以前より注文を受けている納品先については、コロナ前後で注文量に大きな変動はない。現在は時間に余裕があるため、現行の商品をリニューアルして販売できるよう改良に取り組んでいる。

クリーニング作業の内容は特に影響を受けておらず、売り上げについてもコロナ流行前とほぼ変化はない。

望の丘ワークセンター

柚子ジャムを今年2月に準備したが、新型コロナウイルスの自粛期間に入り販売する機会がなくなった。柚子ジャムはほとんど在庫が残っている。

今年は玉ねぎが大豊作。昨年は玉ねぎを収穫して味わうイベントを開催し、地域の人や高梁市内の福祉事業所の人たちに参加してもらったが、今年は大勢の人を集めるわけにはいかない。ジャムと玉ねぎは販売用のチラシを作った。各事業所へ配達するので、注文してほしい。

りんごのオーナー制度は今年も募集する予定。ただし収穫時期の感染状況によっては、お断りすることになるかもしれない。

春のイベントがなくなったこともあるが、元々4～6月は地域のバザーにもあまり出ていなかった。秋以降のイベントも中止になるなど見通しが立たず、これから“痛み”が出てくるだろう。何か方法を考えなければならない。

竜ノ口寮

旭川荘の販売イベントで七宝焼き作品を出しているが、購買層のニーズをつかむのが難しく、イヤリングやネックレスといったものが販売につながらない。これまでの反省を踏まえ、新しい素材を探して作っていききたい。

今年初めに参加した招き猫美術館のイベントでは、七宝焼きの猫グッズがいくつか売れた。今後も機会があれば出していききたい。

ただ、コロナの影響で3月以降、外部講師の受け入れができず、七宝焼きの活動自体もできていないため、新しい作品を作るまでには至っていない。

真庭地域センター

旭川荘をテーマに販売促進につながるものができればと、真庭産ヒノキで「ゆずりは」のバッジを試作してみた。名刺も作ってみたが、木の厚みが出るので売り物としては難しい。

スッポンは地元の旅館から引き合いがあって、その都度、個別に対応している。今夏の産卵数も多く、例年6割くらいは孵化するので、相当数の稚亀が産まれると思う。

コロナで影響を受けている真庭市内の就労継続支援事業所に、市が100万円を補助する「真庭つながり促進事業」というものがある。一部はコロナ対策に使わなければならないが、残りは新製品の開発資材などに充てたい。

密集避け小規模に 各施設で夏イベント開催

新型コロナウイルスの感染予防のため、今夏は「夏まつり旭川荘」「ひらた盆踊り大会」などの恒例行事が中止になりました。代わりに各施設では、密集を避けた小規模のイベントを開催。利用者が楽しいひと時を過ごしました。



竜ノ口寮 ユニット別に 納涼祭

竜ノ口寮では長引く自粛生活の中、利用者に夏を感じてリフレッシュしてもらおうと、7月末から8月上旬にかけて納涼祭を企画。密集を避けるため寮全体ではなく、ユニットごとにそれぞれの担当スタッフが工夫を凝らして開催されました。

20人の女性利用者が暮らす通称「3丁目」のユニットでは8月3日、この日のために準備した浴衣や甚平、お気に入りのTシャツなどを着た利用者たちが会場の食堂に集まり、ヨーヨー釣りや人形すくいを楽しみました。

会場にはスタッフが色紙で作った風鈴や提灯のイラストが飾られ、ラジカセから流れる炭坑節が祭りのムードを盛り上げます。水の入ったビニールプールやたらいに、ピンクや黄色のカラフルなヨーヨーの他、金魚やアヒルの人形を浮かべ、利用者たちはスタッフ手作りの“釣り竿”やポイでお気に入りの“ゲット”。赤と緑のヨーヨーを釣り上げた利用者は「ヨーヨー釣りは初めて。好きな明るい色が取れて嬉しい」と笑顔を見せていました。



人形すくいを楽しむ利用者



午後は花火の映像を見ながらかき氷を堪能した

あおば 夏祭り

あおばでは7月18日に夏祭りを開催しました。今年はさまざまな行事が中止になる中、少しでも利用者が楽しめることを、と企画。利用者35人、職員17人が参加し、みどり学園の園庭を借りて実施しました。

会場にはそうめん、たこ焼き、かき氷などの出店や射的や輪投げなどのゲームコーナーを多数用意。参加者の中には浴衣や甚平を着た人もいて、お祭りの気分が高まります。

オープニングは職員有志による出し物があり、ピエロに扮した職員が輪車に乗りパフォーマンスを披露。“コーラ飲み早口言葉ゲーム”や“ひげダンス芸”もあり、場を盛り上げます。その後もじゃんけん大会や写真撮影会など盛りだくさん。一番盛り上がったのはスイカ割り大会で、棒を持って目隠しをした参加者に「右!」「そこ!たたけー」などの声援が飛び交い、見事スイカを割ると大きな拍手が沸き起こりました。

最後はみんなで「うらじゃ」を踊り、笑顔で楽しい一日を締めくくりました。

(広報委員 和田倫明)



ピエロの技に注目が集まる



うらじゃ踊りでは手を取って元気に踊った

わかば寮 盆踊り大会

わかば寮では中止になったひらた旭川荘全体の盆踊りの代わりに7月16日、寮内で盆踊りを開催しました。当日は前日までの雨が嘘のように晴れ上がり、屋外で実施することができました。

メインは屋台で、フランクフルト、デザート、飲み物、かき氷、たこ焼きなどの「食べ物」と、ヨーヨー釣り、輪投げの「ゲーム」を用意しました。開始前から屋台の前には列ができていて利用者の期待感が伝わってきました。イベントが始まると、どの人も屋台の食べ物、ゲームに夢中になり、最後の踊りでは、音楽に合わせて自然に踊りだし、楽しい時間になりました。



多くの利用者で賑わった「ゲーム」の屋台



参加者が音楽に合わせて踊る盆踊り会場

今回、ひらた旭川荘全体での盆踊りが中止になったことは残念ですが、小規模で開催したことで利用者が楽しんでいる姿を間近で見ることができたのは良かったと思います。

(わかば寮 安達光弘)

南愛媛療育 センター 夏祭り

南愛媛療育センターでは7月11日に夏祭りを開催しました。今年度の夏祭りは、新型コロナウイルスの影響により、利用者のご家族やボランティアは参加せず、利用者スタッフのみで行いました。

利用者は甚平やアロハシャツを着て夏祭りに参加。会場に入ると、法被を着たスタッフが「いらっしゃい」と迎え入れてくれます。ヨーヨー釣りでは、プールに浮かべたヨーヨーを網ですくい取ります。気に入ったヨーヨーが取れた時は、皆大喜び。綿菓子コーナーでは、スタッフに「大きい綿菓子を作ってください」とお願いする人もいて、丸くて大きな綿菓子を美味しく頬張っていました。他にも笹飾りを背景に記念撮影をしたり、モニターに映る花火の映像を鑑賞したり、くじ引きをしたりして楽しんでいました。



人気の綿菓子の前には列も



狙ったヨーヨーに網を伸ばす利用者

(南愛媛療育センター 田中香帆)

旭川荘をちょっと元気に 昼の市開催 14施設・事業所が参加

「コロナに負けるな!」「旭川荘をちょっと元気に」を合言葉にサービスセンター前のむすびの園で8月26日、“拡大版”昼の市が開催されました。

コロナ禍でバザーや夏祭りなどが中止になり、就労系事業所の売り上げが減少している中、少しでも販売の場を設け、落ち込んでいる雰囲気打破しようと、あおばの提案で実施。毎月第4水曜日に開催している昼の市も、ここ数カ月は吉備ワークホームと漬物を販売する事業所だけが細々と出店していましたが、今回は祇園地区以外のぎおんの社会議のメンバーやトモニーにも声をかけ、計14施設・事業所が参加しました。

会場には日除けのテントが立てられ、木工製品やアクセサリ、野菜やクッキーなど施設の自慢の品々が並びました。中でも目玉はかき氷の無料配布です。暑い夏を共に乗り切ろうと来場者へ提供され、多



せとうち旭川荘もパンを作って久々に参加



来場者に手指消毒を呼び掛けるソーシャルディスタンスマン

くの人が冷たい氷で涼をとっていました。

感染予防にも気を配り、出店者はマスクやフェイスシールドを着けて販売。また、3密を避けるため係員が扮する“ソーシャルディスタンスマン”がアルコール消毒液と体温計を手に来場者へ注意喚起しました。

今回の昼の市開催を呼びかけたあおばの黒住卓副所長は「短時間の開催だったが、各施設から職員と利用者が集い久々のイベントを楽しんでもらえたと思う。感染防止をしながら、また近いうちに第2弾を企画したい」と話します。

リレーコラム

真っ白な紫陽花が咲き誇る

花を飾ったり育てたりすることに全く関心がなく無機質な我が家に、毎年咲き誇る唯一の花があります。マンション住まいのベランダでひと際存在感を放っている純白の紫陽花。

実は、平成27年4月に執り行われた、故江草名誉理事長のお別れの会で係員をした帰り際に頂いた、会場を飾っていた紫陽花のひとつです。当時はまだ片手に乗るほどの小さな鉢植えでした。何しろ、花に無関心なので知識のかけらもなく、「紫陽花の育て方」でネットを検索しまくり、Amazonもフル活用し、「紫陽花の土」や「紫陽花の肥料」を賢く利用。病害虫に見舞われて葉が変色したときには、勤も働かせて目星を付けた薬剤を散布すると効果てきめん、青々とした葉に復活しました。

あるとき、何気なく白い紫陽花の花言葉を調べたところ、「寛容」「ひたむきな愛情」というものでした。真っ白で変化することのない紫陽花は全てを包み込む大きな心を表しているのでしょう。福祉人の指標となる花言葉かもしれないと

勝手な想像をしてみたりもします。毎年植え替えをするうちに、順調に大きくなっていき、最初は淡々としていた気持ちも、いつの間にか「枯らすわけにはいかない」という使命感のようなものを抱いていることに気づきます。昨年からは、これ以上大きくなると居場所がなくなるため、「置かれたところで咲いてください」という渡辺和子先生の著書の一節を思い浮かべつつ、しっかりと張った根を整えて、元の鉢に収めています。

マンション7階南向きのベランダは、灼熱の太陽をまともに浴び、油断するとすぐに葉がしおれてしまい、慌てて水やりをする日々、「寛容」な心で元気な姿に戻ってくれます。涼しくなるまでの間はその繰り返し。冬を無事に越し、来年も純白の花がこぼれんばかりに咲き誇るでしょう。

(広報委員 上原利恵)



今年も咲いた純白の紫陽花

Zoom活用しオンライン授業 カレッジ旭川荘 オープンカレッジも

カレッジ旭川荘は新型コロナウイルスの感染拡大に伴い休校となった5月、インターネットを使ったオンライン授業を導入。カレッジ生の学習習慣や規則正しい生活の維持に活用しました。

4月16日に全国を対象に緊急事態宣言が発令されたことを受け、カレッジ旭川荘は同20日から休校となりました。期間は5月の連休明けまでの予定でしたが、宣言の期限延長(5月4日決定)に合わせて休校が5月31日までとなり、自宅学習の期間が1か月超に及びました。

当初、自宅学習となったカレッジ生への課題はホームページや郵送などで指示し、体調管理などはメールや電話を使って個別にやり取りをしていました。しかしカレッジ生の中に長引く自宅学習で生活リズムや勉強習慣が乱れる人が出てきたこと、感染拡大の第2波、3波への備えもあり、Web会議ツールの「Zoom」を利用したオンライン授業の実施を検討。授業で1人1台使っているノートパソコンにZoomのアプリケーションをインストールして、全学年を対象に5月18日から本格運用を始めました。

1、2年生では規則正しい生活を維持するための朝の会の他、数学や音楽などの授業も行い、板書はビデオカメラで映し画面に見やすく表示。双方向のやり取りもできるZoomの機能を使い、支援教員が随時「ここまでわかった人は合図して」などと呼びかけ、カレッジ生の反応を確認しながら授業をすすめました。

6月からカレッジが再開されたため、オンライン授業を行ったのは約1週間でしたが、来年度の入学希望者が参加した7月23日のオープンカレッジでは、そのノウハウを生かし「リモート方式」で開催。感染予防と3密を避けるため、参加者には別室でZoomを使って授業風景を見学してもらった他、カレッジ生への質疑応答なども行われ好評でした。

オンライン授業を担当した岡田光生支援教育課長は「リモートならではの難しさもあったが、録画機能を使えば授業を振り返って理解を深めることもでき、工夫次第で引きこもりの人の授業参加にも生かせる。新たな可能性を探りたい」と話します。



Zoomを使ったオンライン授業。
「早く皆に会いたい」と話すカレッジ生たち



オープンカレッジでは授業の様子をビデオカメラで映し、別室にいる参加者に伝える

カバヤ食品より清涼菓子寄贈 熱中症予防に

カバヤ食品株式会社(岡山市北区御津野々口)より6月25日、同社の清涼菓子「塩分チャージタブレット」の小袋を3,200袋寄贈していただきました。

同社広報室の岩本紘子さんが寄贈品を届けに来荘。岩本さんは、新型コロナウイルス対策で職場や生活の場でもマスクを着ける機会が増えていることに触れ「暑いなかで、マスクを着用しての業務は過酷かと思います。水分補給の際にタブレットで塩分も補うなど、職員の皆さんの健康管理に役立てていただければ」と話し、旭川荘療育・医療センターの藤堂博之院長代理と旭川学園の須田篤人園長にタブレットの箱を手渡しました。

同席した矢野有哉事務局長は「これから暑くなるので大変ありがたい。各施設に配り活用させていただきます」とお礼を述べました。



「塩分チャージタブレット」を手渡す
カバヤ食品の岩本さん(左)

イベント延期、中止のお知らせ

9月27日に倉敷市民会館で開催を予定していたオペラ「アマールと夜の訪問者たち」(旭川荘、グラチア・アート・プロジェクト共催)は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、来年に延期となりました。

また、例年10月に旭川荘結びの杜で開催している「旭川荘環境福祉フェア」も中止となりました。



編集後記

今回夏祭りの記事を寄稿しました。様々な行事が中止となる中で、毎年やっているからとか、今まで通りでいいやではなくて、「今」何を大切に思い、その中で何ができるかを考えそれを実現することが大事だと改めて思いました。

(広報委員 和田倫明)